

要 旨

伝統的建造物群保存地区における住民の継続居住に関する研究

和 田 章 仁（福井工業大学 建設工学科 教授）

池 田 岳 史（福井工業大学経営情報学科講師）

歴史的町並み、とりわけその中の伝統的建造物群保存地区は伝統的建造物とその周辺環境が一体をなして、質の高い町並みを保存している区域である。本研究ではこの伝統的建造物群保存地区の住民が将来の継続居住に対して抱いている危機を明らかにするとともに、今後も安心して居住できる環境の創出についての方策を検討した。

すなわち、石川県金沢市の東山ひがし地区および福岡県八女市の八女福島地区を対象として、行政とのヒアリングおよび地元住民に対するアンケート調査を通して、居住支援施策および住民の継続居住に対する考えを把握した。さらに、国外においてはわが国との法体系が異なることから、欧州の代表的な歴史都市であるドイツのローテンブルクにおいて、歴史的町並みの保存施策とまちづくりの基本方針を、現地の行政へのヒアリングおよび現地調査により把握した。

まず、東山ひがし地区においては、被験者の継続居住希望者は8割にも上っていることから、金沢市は建築物の保存と地区住民の利便性を図るため、自家用車の車庫を地区外に借りる場合の助成金制度を導入している。また、継続居住に関する住民意見は、防火・防災、住民の高齢化などの対策を要望しており、さらには観光客の増加によるプライバシーの侵害やゴミの散乱といった観光客のマナーへの注文も挙げている。

次に、八女福島地区においては、伝統的建造物群保存地区指定に対する否定的意見は東山ひがし地区を上回っていた。この理由としては、地区指定により観光化が図られ、これにより地区の活性化を期待したにも拘わらず、人口減少、土地評価の不安といったマイナス面が比較的強く意識されていることから、現段階では地区の活性化が期待するほど図られていないからと考えられる。

一方、ローテンブルクの建築物は城塞都市当時の構造に基づいていることから、現在の生活様式に合わない点が多くあり、街の形態そのものに不都合な点が多くある。このことから、市は住民が住めない博物館都市となることに危機し、建築物のフロア別用途規制などの諸施策を導入している。また、住民と観光客との関係については、市民と観光客のトラブルは殆ど無く、むしろ観光都市として市民の多くが観光客を歓迎している

ことから、観光化に対する文化が根付いているものと考えられる。

以上のことから、今後の伝統的建造物群保存地区におけるまちづくりは、防火・防災、住民の高齢化および建物の保存修理への対策が必要ではあるものの、町を博物館的な保存ではなく、その地区の文化や個性に配慮しつつ、将来においても住民が住み続けることができるためのハード、ソフト両面にわたる施策を実施する必要がある。